

菅貫神事

日付：7月31日

夏祭りである御神幸祭の初日、宇佐神宮の三柱の主な神様が上宮（上の社）の御殿から神輿に移され、頓宮と呼ばれる一時的に神様を安置する場所に運ばれ、2泊3日間滞在します。頓宮で儀式が始まる前に、神職は自分を清めるために菅貫というお祓の儀式を実行します。似たような夏の祓いの儀式が平安時代（794-1185）から行われていましたが、この形式は宇佐神宮に特有のものであり、独特なお祓いの道具も利用します。

頓宮の側にある柵の茂みに、川を模したジグザグの形の紙飾りが付いた三つの御幣という聖なる棒が設置され、その前に供物用の小さな台と藁の敷物が置かれています。清めの祈りを3回唱えた後、各神職は、解縄串を使用して自分を清めます。解縄串は、上部の切れ目に紫色の紙飾りと一組の平らな藁が挟まれた特別な木製の棒です。棒の柄には、1本は時計回りに、もう1本は反時計回りに巻き付けられた2本の縄が結び付けられ、お祓い中に、各神職は縄をほどき、儀式的にそれらを散乱させます。

儀式の次の段階では、編んだ草で作られた2つの大きな輪を組み合わせた別のユニークなお祓い道具を使用します。一つの輪はお供え物の前にある敷物の周りに置かれ、もう一つの輪は補助役が垂直に持っています。各神職は順番に、一つ目の輪の中でひざまずき、深くお辞儀をします。その間、補助役はひざまずく神職の上から二つめの輪を地面に降ろします。この行動は菅貫（草の輪を通り抜けること）と呼ばれ、この儀式の名前の由来となっています。神職は起き上がった後、水による祓を象徴する3本の御幣に解縄串を投げます。

宮司の場合、儀式はもっと複雑です。別の編まれた草の輪のセットが使用され、国のため、人々のため、そして宮司自身のために、3回輪をくぐります。くぐった後は毎回、宮司は立ち上がり、8の字を描いて方向を交互に変えて開始位置に戻ります。宮司はお清めが終わるとすぐに、御幣へ解縄串を投げます。清めの祈りをさらに3回唱えることで儀式全体が完了し、御神幸祭という夏祭りを進めることができます。